The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	学生が提言するということ : アジア・太平洋学生会議をふりかえって
Author(s)	藤川, 幹人
Citation	大阪外国語大学アジア太平洋論叢. 1996, 6, p. 341-345
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99735
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

学生が提言するということ

アジア・太平洋学生会議をふりかえって

藤　川　幹　人*

大阪外国語大学アジア太平洋研究会の協力のもと、学生からの提言をAPEC大阪会議及び広く一般に提出することを目的に、学生版のAPECが開催された。APEC本会議の約1カ月前の1995年10月14日から16日にかけて、大阪国際交流センターで開催され、留学生と日本人学生がAPECと同じ18カ国及び地域の代表団を構成し「模擬APEC閣僚会議」のスタイルで行われた。以下は、企画者の立場からこの会議を自己分析的に回顧したもので、『経済セミナー』1995年12月号の記事に一部修正を加えたものである。

問題意識と着想

国際情勢に関する多くの情報はつねにわれわれ学生とは一枚隔てて流れており、そういった情報を獲得しようとする場合、われわれは活字にせよ映像にせよ何らかのフィルターを通った二次的なものに依存せざるを得ない。このような多くの二次的な情報が氾濫する今日、その正当性を検証することは困難を極める。また、国内においては「シラケ世代」との汚名のもとに学生が大衆化し、学生が声高らかに発言し、影響力をもつことが少なくなって久しい。いろいろな国の留学生との交流で痛切に感じたことではあるが、彼ら、とくに中国や東南アジアからの留

＊藤川幹人：大阪外国語大学　地域文化学科学生、東アジア（中国）専攻。
アジア太平洋学生会議実行委員会委員長。
FUJIKAWA Mikito: Student, Major in East Asian (China) Studies, Dep. of Area Studies, Faculty of Foreign Studies, Osaka University of Foreign Studies. Chairman of Exective Committee, Asia-Pacific Student Meeting 1995.

学生は自分の国の将来を背負って生きているともいえるほど、自国に誇りを持ち、将来をつねに慮っているのが言葉のはしばしから伝わってくる。また彼らの発言は、自国において、それに見合うだけの「次代を担う世代の声」としての影響力を持っている。自国の将来に無関心な日本の学生は世界的に珍しい存在である。日本の学生はこの状況を鑑み、恥じて赤面すべきである。

今、人類は200年から300年に一度起こるかどうかの世界史の大転換期に直面している（角山栄『アジア・ルネッサンス』）といわれているが、日本もこれを受けて長期的な方向づけを強いられている。この転換期の向こう側にある次代を担って行くはずの学生の世代が、自国の将来に無関心で社会に発言することもない状況では日本の将来は暗い。

こういった問題点を克服する手立てとして私は、「体験的学習」と「情報のフィードバック」として学生からの提言を為政者に提出する機会を設けることを考えた。これがアジア・太平洋学生会議の着想の源となったのは、いうまでもない。

活　動　開　始

95年の元旦の新聞に、APEC大阪会議の地元である関西がいかにしてホスト役を務めるべきなのかについての記事が掲載されていた。その記事は、常日頃からいかにしてわれわれ学生の意見を社会にアピールするかを考え、チャンスをうかがっていた私にはとても興味深いものであった。この秋には関西がAPEC一色となることを予想し、APECは学生が体験的に学習する題材だけではなく、関係者にフィードバックして情報の流れを対面通行にする素材になり得ることを確認し、興奮さえも覚えた。私はさっそく、過去の経験に基づきながら企画書の原版をその日のうちに書き上げ、翌日から会議を運営するための組織作りを開始した。

私は同じく「体験的学習」を目的に大阪外国語大学内において、国際連合におけるNPT条約の再検討を素材としてシュミレートする「模擬国連」を企画したことがあった。しかし、「体験的学習」を最大の目的としたため学内の留学生と日本人学生46人で構成する規模の小さな自己完結的な会議で、地方ニュースとして数十秒間報道されたのを除いてマスコミで取り上げられることもほとんどなく、影響力はないに等しかった。しかし、この経験は今回の会議を立ち上げる際に大

いに役立った。まず、議事進行手続きに関しての多くは模擬国連を踏襲しており、各国・地域の代表が「もし自分がその国の官僚であればどういう政策を立て、どういう交渉をするのか」という立場で会議に参加する形態も、模擬国連を踏襲したものだ。

「学生からの提言」というコンセプトは今回新しく加わったものであったが、それを全うするためには、ある程度の影響力と模擬、説得力が必要であることは明らかだった。広告代理店の方々の指導をあおぎながら作成された予算は、われわれ学生にとってはめまいがするほどの模擬だった。最終的に黒字となり、今となってはこの予算をひとのみするほどのAPECに対する地元大阪の熱意に感謝しながら胸をなでおろすばかりだが、予算規模から発生しうる「社会的責任」というプレッシャーに何度も押し潰されそうになったのは確かである。

説　得　力

会議の説得力に直接的にかかわる、議題運びと会議までのソフト面のスケジュール作成、調整は慎重に行なった。度重なるスケジュールの調整で不安をつのらせるスタッフもいた。

議題運びの際、私は学生がAPECの本会議に提言を提出する意義について考えた。まず、学生が各国・地域の閣僚に扮して政策を決定・発表する際、どのうようなメリットが生じるのか、すべての参加者が悩まされただろう情報不足のほかに、未熟さからくるデメリットは確かにあるが、メリットも同時にそこに存在するのではないかと私は考えた。

いかなる利益集団にも属さない自由な立場にある学生が、各国・地域の閣僚に扮して議論すれば、各国・地域の利益のみにとらわれることなく、アジア・太平洋地域全体の利益を考えたより理想的な政策が立案されうるというのがそのメリットである。

われわれは、こういった学生が議論するメリットを最大限に引き出し得る議題を選ばなければならなかった。APEC大阪会議では、ボゴール宣言に基づく貿易・投資の自由化の具体的措置が最大の論点になることが予想されたので、まずこれを議題とした。APECでは開発協力が大きな目的の一つになっているが、国益を

追求しすぎると環境を無視しがちになってしまうのは明らかなので、現実のAPECではとくに論点として上がったことは無かったが、学生版のAPECでは、アジア・太平洋地域の持続可能な開発を考えるセッションが必要であると考えた。最後に、「ゆるやかな協議体」であるAPECが、将来どのような組織になっていくべきかについて議論するセッションを設けた。結局、以上貿易・投資、開発・環境、組織の3つを議題とすることが決まった。

貿易・投資を東京地区のスタッフに任せ、開発・環境、組織を関西地区が担当し、研究局が発足した。研究局の最初の仕事は会議のガイドの執筆および編集であった。APECに関する文献は最近でこそ増えているが、95年4月の時点では皆無に等しかった。APECそのものがまだ新しく、また議事録が公開されていなかったため、その他の資料の入手も困難を極めた。このガイドはこういった状況を補い会議の参加者に提供するためのものだった。ガイドの作成は、中央省庁や新聞社から譲り受けた資料やすでに出版されている文献を参考に、研究スタッフが持ち寄った原稿をまとめる合宿を繰り返すという、長い道のりとなったが、この会議に大きな説得力を与えた。

この会議の各国・地域の代表団は、その国からの留学生1人と日本人学生2人によって構成され、各自が3つの議題のうちの1つをスペシャリストとして研究した。他国・地域との交渉もそれぞれスペシャリストがイニシアチブをとることになる。貿易・投資を担当する参加者は東京で募集され、勉強会、事前会議とも東京の代々木オリンピックセンターで行なわれ、開発・環境と組織は大阪のギャラリーよみうりにて開催された。9月24日から10月13日に、各国の政策から一次的な妥協案の作成を行なう事前会議を終えて、10月14日、会議参加者は前日の事前会議閉幕後も続けられた夜通しの議論で睡眠不足にさいなまれ、目をこすりながらの開会式となった。公式会議中だけではまとめきれなかった論点があまりにも多く、結局14日、15日の晩も遅くまで非公式会議が続き、16日に発表された共同声明は事実上夜通しの議論に負うところの大きなものとなった。

ジレンマ

この会議のコンセプトには、大きなジレンマが内在されていた。本会議が迫るにつれ、皆が徐々に感じ始めたことであるが、会議の参加者が研究を積み重ね自

分の担当する国・地域の事情に明るくなればなる程、自由な立場であるはずの学生ならではの発言の可能性が失われて行き、実際の閣僚と同じように国益を意識した発言しかできなくなってしまうのである。皮肉なことに、各参加者の努力の何よりの証拠ともいえるが、会議の傍聴者や一部のマスコミから「学生らしさに欠ける」との厳しい批判をいただいた。われわれの提言の内容にマスコミがスポットをあてようとしなかった理由の一つとさえいえるかもしれない。このジレンマは、この会議の大きな反省点である。

影　響　力

私は会議立ち上げ当初からマスコミの反応を注視していた。マスコミの興味の対象や度合いは、社会全体のそれらに存在し、この会議が影響力を持ち得るかどうかと大きくかかわっていると理解していたからである。

結果としては、APECという首脳級のこれだけ規模の大きな会議が大阪で開かれるのが初めてであったという、APEC本体の話題性と、「シラケ世代」と揶揄される現在の学生がこのAPECに対して提言するという物珍しさが相俟って、マスコミの反応は私の予想と期待をはるかに越えたが、提言の内容にスポットをあてる報道は少なく、今時の学生にしては珍しいイベントと、それを企画運営する私という物珍しい人物を分析する報道が大半を占めた。学生の発言そのものが影響力をもつまでには、多大な学生の努力と、長い時間を要することを実感させられた。

今後とも私は、学生からの提言が影響力をもつまで努力を怠るつもりはない。アジア・太平洋学生会議を恒常化させるために、来年のAPEC開催地であるマニラの大学とすでに連絡を取り付けている。国内においてはこの会議の実行委員会の有志によって、「学生シンクタンク」を設立して活動を開始しており、その最初のイベントとして「雇用問題」「外交政策」「政策決定システム」を素材に、現在の日本的システムが是か非かを問う、学生によるパネル討論を予定している。

最後にこの場を借りて赤木攻教授、東泰介教授をはじめご指導ご協力を賜わりました大阪外国語大学アジア太平洋研究会の諸先生方に感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。